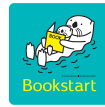


Bookstart Newsletter



2020
秋
No.70

ブックスタート・ニュースレター



静岡県静岡市

特集

2021・2022・2023 年度

「ブックスタート赤ちゃん絵本」が決定

ブックスタートの会場で絵本を読んでもらい、笑顔いっぱい親子。上の写真のように、赤ちゃんに絵本をひらく楽しい「体験」をした保護者が、「やってみたいな」と思った時に、すぐに赤ちゃんとの絵本の時間を持つことができるよう、ブックスタートでは絵本そのものをプレゼントします。

各地でプレゼントされる絵本の候補となるのが、「ブックスタート赤ちゃん絵本」です。今年、その選考が行われ、2021年度からの3年間、自治体に提供する30タイトルが決定しました。

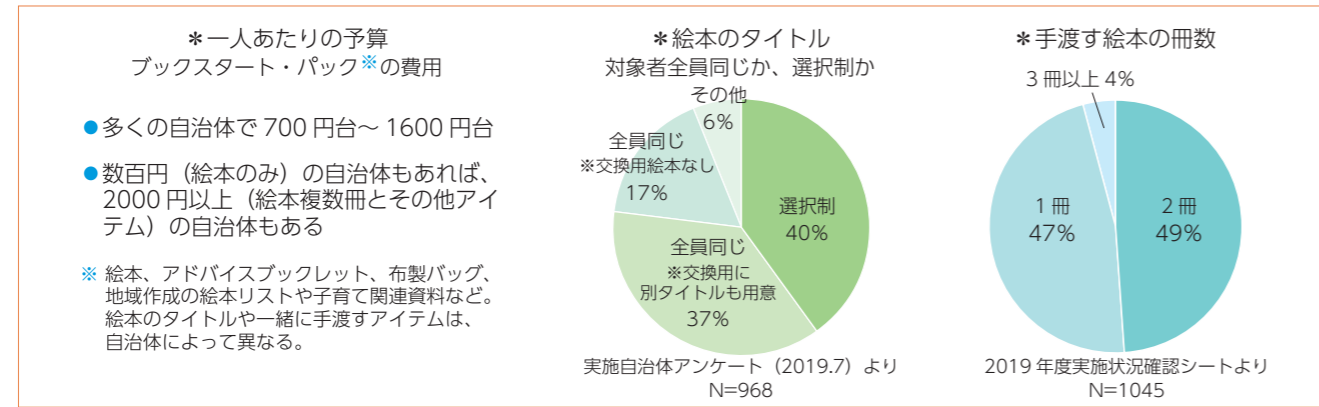
これまでは、2日間の会議で選考を行ってききましたが、今回は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、1日目の内容を紙上での意見交換に変更。まず3月に、5名の選考委員（P5）が理由とともに絵本を推薦しました。4～5月にかけて推薦絵本101冊を各自で検討し、タイトルごとに意見を提出。互いの意見を共有した上で、6月に東京にて会議を開催し、各委員の専門性や経験に基づいた活発な討議が行われました。

P.2へつづく

P.6

追悼 ウェンディ・クーリングさん

（ブックスタート発案者）



マスクをつけ、委員同士の距離を取って議論

【選考基準】
赤ちゃんが保護者と豊かな言葉を交わし、気持ちを通わせながら楽しい時間を過ごすことで、心健やかに成長することを応援する絵本のうち、次のいずれかにあてはまるものとする。
（１）年月を経て赤ちゃんから支持され続けてきた絵本。
（２）今後、赤ちゃんから支持を受け可能性が高い絵本。
◎選考は、委員の独立した判断によって行われ、出版社やNPOブックスタートの意向が反映されることはありません。

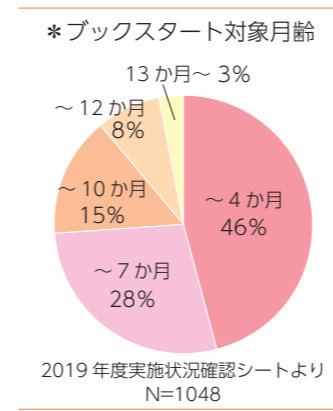
絵本の選考は、赤ちゃんと絵本の関係について豊富な知識と経験を有する5名の委員（P5）が、日本国内において、おおよそ満2歳児以下を対象に出版流通している絵本から、公平・中立的な立場で行いました。

独立・中立的な「選考会議」

自治体や親子の様々なニーズを踏まえて30タイトルを選出

10回目となった今回の選考では、自治体の様々な状況（*）を鑑みながら、主に左記の点について、各委員の多様な専門性や経験を出し合いながら意見が交わされました。

- 赤ちゃんが興味を持ちやすい内容か。
- 各家庭で、赤ちゃんが家族が楽しくふれあう時間を持ちやすいか。
- 様々な状況の保護者が対象であることに配慮したタイトルが入っているか。
- 絵本の内容をよく知らない保護者でも手に取りやすいものが入っているか。
- 自治体が事業を継続しやすい価格帯となっているか。
- 自治体が行う事業として、出版社や著者等のバランスが取れているか。
- 家庭での保有率が低そうなタイトルが入っているか。



*自治体の状況

どの絵本を手渡すか
決定は地域の皆さんで

どのような視点や配慮をもって手渡す絵本を選択するかは、自治体によって異なります。絵本を選ぶ際は、ぜひ実際に手に取って、赤ちゃんや保護者の気持ちを考えながら読みあい、皆さんの思いがこもった絵本を選んでください。

◎30タイトルの絵本を貸し出します。お気軽にお問い合わせください。

各地における絵本選択の考慮点

- 【定評のあるもの／新しいもの】**
- ロングセラーや赤ちゃん絵本として定評がある。
 - 出版年が比較的新しく、家庭での保有率が低そうである。
- 【赤ちゃんへの配慮】**
- 対象月齢の赤ちゃんの反応が引き出しやすい。
 - 月齢の低い赤ちゃんでも楽しめるものと、少し大きくなっても楽しめるものを組み合わせる。
 - はつきりした色の絵や、繰り返しし言葉、擬音語・擬態語が楽しいもの。
 - 親子のふれあいに繋がりがやすい。
 - 赤ちゃんが扱いやすい大きさ、ボードブックなどの丈夫で安全な装丁。

次ページへつづく

2021・2022・2023年度
ブックスタート
赤ちゃん絵本

(50音順・年は初版刊行年)



 『へっこぶつとたれた』 構成・文：こがようこ 絵：降矢なな 童心社 2018年	 『ぴょーん』 作・絵：まつおかたつひで ポプラ社 2000年	 『はなびドーン』 作：カズコG・ストーン 童心社 2012年	 『バナナです』 作：川端誠 文化出版局 1984年	 『ととけっこう よがあげた』 案：こばやしえみこ 絵：ましませつこ こぐま社 2005年	 『どうぶつのおかあさん』 文：小森厚 絵：数内正幸 福音館書店 1981年	 『いないいないばあ』 文：松谷みよ子 絵：瀬川康男 童心社 1967年	 『あっぶつぶ』 文：中川ひろたか 絵：村上康成 ひかりのくに 2003年	 『あっ！』 文：中川ひろたか 絵：柳原良平 金の星社 2008年	 『あ・あ』 作・絵：三浦太郎 童心社 2013年	 『まんまんぱっ！』 作：長野麻子 絵：長野ヒデ子 童心社 2016年	 『まるまる』 作：中辻悦子 福音館書店 1998年	 『まるさんかくぞう』 作：及川賢治・竹内謙子 文溪堂 2008年	 『まねっこおやこ』 文：おくむらけんいち 絵：マッティ・ピックヤムサ ブロンズ新社 2016年	 『ぼんぼんポコポコ』 作・絵：長谷川義史 金の星社 2007年	 『ペろペろペろ』 作：長新太 BL出版 1999年	 『ぎったん ばつこん』 文：なかえよしを 絵：上野紀子 文化出版局 1977年	 『かんかんかん』 文：のむらさやか 制作：川本幸 写真：塩田正幸 福音館書店 2010年	 『おひさまさんさん おはようさん』 作：なかじまかおり 岩崎書店 2012年	 『おひさま あはは』 作・絵：前川かずお こぐま社 1989年	 『おつきさまこんばんは』 作：林明子 福音館書店 1986年	 『いろいろばあ』 作：新井洋行 えほんの杜 2011年
<p>外国語を母語とする方への対応： 各絵本の概要を9言語で紹介するほか、本文の読みをローマ字で表記した「多言語版 絵本紹介シート」を提供します。</p> <p>視覚に障がいのある方への対応： 『じゃあじゃあ びりびり』は市販の点字つき絵本を提供します。それ以外のタイトルは、必要に応じて「てんやく絵本」に交換します。</p>	 『ととけっこう よがあげた』の てんやく絵本	 『よこむいて にこっ』 作：高島純 絵本館 1998年	 『みず ちゃぼん』 作：新井洋行 童心社 2011年	 『だっだあー』 作：ナムーラミチヨ 主婦の友社 2010年	 『じゃあじゃあ びりびり』 作・絵：まついのりこ 偕成社 1983年	 『さわらせて』 作：みやまつともみ アリス館 2014年	 『ごぶごぶ ごぼごぼ』 作：駒形克己 福音館書店 1999年	 『くだもの』 作：平山和子 福音館書店 1981年	 『ぎゅうぎゅうぎゅう』 文：おーなり由子 絵：はたこうしろう 講談社 2014年												

選考委員から



子どもの本専門店
「メルヘンハウス」
三輪 丈太郎 さん

今回の選考にあたり、僕は常に「share books」というキーワードを意識しました。大人が子どもと一緒に楽しめる絵本でなければ、子どもには届きません。そのため、「子どもと一緒に絵本を楽しむ方法がわからない」など、絵本に対して敷居を高く感じられている、「今」の若い親御さんの感覚に合うような絵本を、選考委員の皆さんと一緒に模索しました。長年にわたり継承されている絵本を大切にしながらも、既存概念に囚われることなく、大人も子どもと一緒に自由な絵本の世界を楽しんで欲しいと切に願います。



保育士
東京都 公立保育園
村田 晴恵 さん

保育士という視点から、日頃、保育園で子どもが楽しんでいる絵本を中心に選びました。読んでもらう心地よさを知ると、読み手との共通の言語や文化が増えるため、子どもに安心感が育まれます。大人がお子さんと同じ絵本に目を向け、言葉をかけていくことが、遊びとコミュニケーションの原点です。かわいい発語に耳を傾けることができるツールが絵本だと考えます。多くのお子さんが絵本大好きになりますようにと願いをこめて。



乳幼児発達
東京大学大学院 教授
遠藤 利彦 さん

今回の選考過程でも、たくさんの絵本を読ませていただき、改めて、若い作り手によるものも含め、日本には魅力的な絵本が溢れているという印象を抱きました。結果的に、ブックスタート用としては初めてとなる絵本も複数選ばれました。ただ、何か奇を衒ったのではなく、私たちの思いはシンプルに、親と子の間をどれだけ豊かにつなぐことができるか、子どもの絵本の世界への入り口としてどれだけふさわしいか、ということだけだったことをご理解いただければ幸いです。



読書アドバイザー
司書
児玉 ひろ美 さん

日頃、「赤ちゃんの絵本は遊びと会話の延長線上にある」と、さまざまな場所でお伝えしています。それゆえ、ブックスタートでshareする絵本は、子育てが初めての方でも絵本を通して赤ちゃんとの自然なコミュニケーションが生まれるものをと、心掛けて選書に臨みました。それにしても、日本の赤ちゃん絵本群の豊かなこと！読み継がれている作品の普遍的な魅力と、新しい作品のフレッシュな魅力を、バランスよく30冊に凝縮しました。



司書
福岡県 公立図書館
中村 文 さん

赤ちゃんとその保護者を笑顔にする絵本であることを念頭に、絵本と向き合った数か月でした。新しい作家による絵本はもちろんのこと、長く読み継がれてきた絵本も同じように検討しました。選考委員が、さまざまな立場で赤ちゃんと保護者に関わってきた経験に基づいた意見を出し合っ、赤ちゃんとのスキンシップにつながる、リズムミカルな言葉の響きをとともに楽しむことができるなど、“楽しみを分かち合える”絵本を選びました。

Share books with your baby!



COLUMN

赤ちゃんは、成長に応じて少しずつ絵本の楽しみ方の幅を広げていきます

これまでの絵本選考会議で話し合われた内容から、赤ちゃんの月齢ごとの楽しみ方の要素を紹介します。※赤ちゃんの発達には個人差があり、絵本の楽しみ方も様々です。あくまで目安としてご参照ください。

4か月頃になると…

人の顔やその表情の変化といった視覚的な刺激や、言葉のリズム、アクセント、イントネーションといった音声的な刺激にひかれます。こうした要素を含む絵本には、顔や表情を分かりやすく描いているものや、リズムミカルな言葉が繰り返されるもの、場面の変化が分かりやすいものなどがあります。

6-7か月頃になると…

上記の要素に加え、「次にどのようになるだろう」と予測を立てた時に、その通りの結果になる、さらには、そうした中に意外な展開が盛り込まれているような絵本も段々と楽しめるようになります。

9-10か月頃になると…

赤ちゃんと読み手が、同じものに興味を向けて、やりとりができるようになっていきます。ストーリーのある絵本も少しずつ楽しめるようになり、さらには、絵の細部にも注意を向けられるようになるなど、楽しみ方の幅が広がっていきます。

前ページからつづく

【保護者への配慮】

- 絵本になじみのない保護者も容易に楽しめる。
- ひとり親家庭への配慮から、典型的な家族像（両親が揃った家庭等）が想起される絵本は選ばない。
- 【絵本選択制の場合】
- 母子だけでなく、父子の絆も深められるよう、父親とのふれあいをテーマにした絵本を選択肢に加える。
- 市の事業であることから、選択肢が特定の出版社に偏らないように配慮。
- 公平性を保つため、同じ価格帯の絵本を選択肢にする。

ブックスタートの普及を支える「非営利のしくみ」

NPOブックスタートは、選出された「ブックスタート赤ちゃん絵本」を、自治体に「非営利のしくみ」を通じて提供しています。

出版界の合意による特別な価格と流通

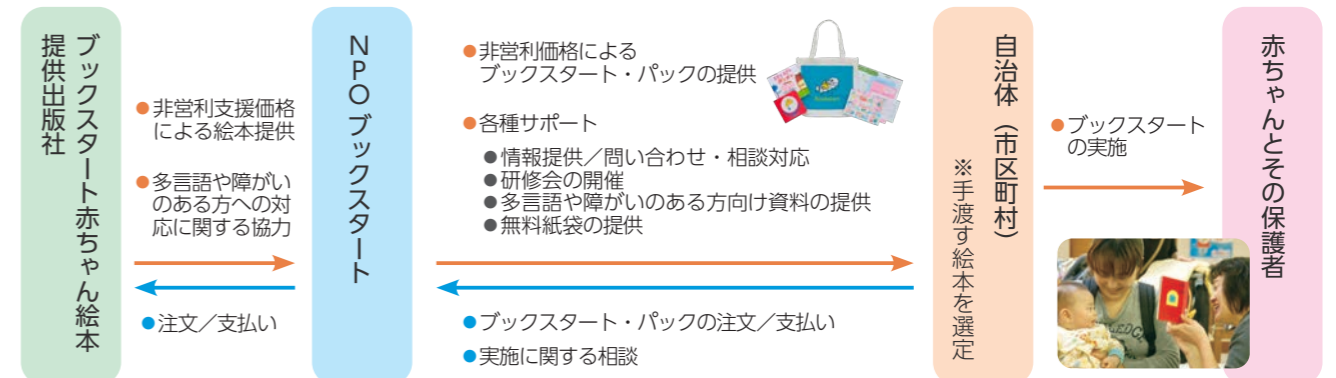
「ブックスタート赤ちゃん絵本」は、提供出版社に得られない「非営利支援価格」で、かつ通常の書籍流通と異なり、出版取次会社や書店を経由せず、出版社から直接NPO

ブックスタートに提供されます。そして、ブックスタート事業で親子に手渡す絵本として自治体に非営利価格で提供されます。ブックスタートのための、この一連の流れを「非営利のしくみ」と呼んでいます。このしくみは、日本にブックスタートが紹介された2000年の「子ども読書年」の際に、出版界（出版社・出版取次会社・書店）が、この活動を応援することを確認して行った「ブックスタート・パックスの絵本提供のしくみからは直接的な利益を得ない」という合意に基づき、多くの出版関連各社の理解と協力に支えられ、運用されています。

しくみの活用が事業の充実に

NPOブックスタートは、この「非営利のしくみ」によって、絵本などのブックスタート・パックスを自治体に提供し、その販売収益により、財政的にも自立した形で組織を運営しています。そして、各種資料の発行や研修会の開催、多言語や障がいのある方へのサポートなど、様々な取り組みを行い、各地のブックスタート事業を支援しています。各自治体に「非営利のしくみ」が活用されることで、全国各地のブックスタート事業の普及と充実が支えられています。

非営利のしくみ ～絵本が赤ちゃんにプレゼントされるまで～



*しくみの適用範囲は、ブックスタート事業で赤ちゃんに手渡される最初の絵本、かつ、NPOブックスタートから本事業を実施する自治体への提供時のみです。それ以外（例：図書館の蔵書、2度目に手渡す絵本など）には適用されません。

追悼

ブックスタート発案者
ウェンディ・クーリングさん



Wendy Cooling : ロンドン生まれ。小学校の英語の教師を経たのち、イギリスのブックスタート推進団体ブックトラスト児童部門の設立に携わり、子どもの読書推進に尽力。その後フリーのコンサルタントとして児童書の出版に携わり、多くの児童文学賞の選考委員を務めた。2006 年子どもの本の世界に功績を残した個人に与えられるエリナー・ファージョン賞を受賞。2009 年大英帝国勲章第五位を受勲。

本年6月21日、ブックスタート発案者のウェンディ・クーリングさんがロンドンで永眠されました。
ウェンディさんの活動は、いつも子どもが主体でした。人生の友となる本に出あえること、子どもたちが本の中で自由に楽しめること。ブックスタートで大切にしている「赤ちゃんにとって絵本は読むもの (read books)」ではなく読み手と共に楽しむもの (share books)」という考えは、20年前、日本で活動を始めようとしていた私たちに、ウェンディさんが伝えてくれたものです。
NPOブックスタートでは、2016年夏に初めて日本にウェンディさんをお招きし、講演会やブックスタートの見学をしていただきました。ウェンディさんとの出会いに感謝し、当時、日本の活動を見て、話してくださったことを紹介した記事を、再掲載いたします。

日本のブックスタートを見学して

*ブックスタート・ニュースレター54号(2016年9月発行)より再掲載



*見学先：千葉県鎌ヶ谷市 (2016.7)
新しく生まれてくる
赤ちゃんのために何かできる幸せ

ブックスタートが始まってすぐに、私は赤ちゃんの表情にきぎ付けになりました。黄色いふわふわした布が、ボランティアの方の閉じた手の中から突然現れる様子は、赤ちゃんにとっては手品のように思えたので



絵本を読む前に布で遊ぶ様子

しょう。瞬時に赤ちゃんを引き付けていましたね。何も無いところから何かが見れるという展開は、ファーストブック（赤ちゃんが初めて出会うことを想定して作られた絵本）ともよく似ていると思います。

そして赤ちゃんはそのまま、絵本の仲間たち、赤ちゃん、お父さん、お母さんと一緒に絵本のひとときを楽しむとは、なんて素敵なことでしょうか。すべての世代の人たちを巻き込むという点も、ブックスタートのいいところですね。

ブックスタートは赤ちゃんを笑顔にしますが、関わっている方たちにも笑顔をもたらしているということがよく分かりました。今回の見学は「ブックスタートとはどういうものか」を私自身が改めて思い起こすことになった、とても素晴らしい体験でした。

日本と世界に広がる
ブックスタートへの思い

今、ブックスタートは世界へと広がっています。国単位で実施しているところだけでなく、小さな地域に限定して実施しているところもあり、全体の広がり把握するのは難しいのですが、それぞれの状況に合う方法で行われています。

日本では、準備が整った自治体から活動を始めています。その無理な

に何かをすることができているのです。これはとても大きな、価値のあることです。私自身、そういう機会に恵まれ、本当に幸せだと思っています。おそらく皆さんもそのように感じていらっしゃるのではないのでしょうか。皆さんの表情を見てると分かります。

「ブックスタートとはどういうものか」を改めて思い起こす

こうした活動を実現させている自治体の方々にも、称賛を送りたいと思います。活動を運営している、時には困難に直面することもあるでしょう。私も、イギリスのブックスタートでは折に触れて、予算など様々な事柄について、議論しなければならぬことがあります。時には闘わなければならないこともあります。それは、ブックスタートがいっつも私の心の大切な場所にあるからなのです。

もしも私が今の自分の仕事をしていなかったとしたら、私は皆さんと同じことをしている、していきたい、と心から思います。志を同じくする

世界に引き込まれていきました。真剣なまなざしで耳を澄ませて、本のすべてを知りたがっているということが、ひしひしと伝わってきました。今回の見学で印象的だったのは、あまり本に興味を示さない赤ちゃんがいても、誰も無理に見せようとはしていないことです。赤ちゃんはみんな、集中できる長さも度合いも違います。赤ちゃんのペースを守ることはとても大切なことですね。何よりも、ブックスタートに関わっている皆さんが素晴らしいです。少し個人的なこともかもしれませんが、ボランティアの方には、私と同世代の方が多くいらっしゃると思います。そんな私たちの世代が、新しく生まれてくる赤ちゃんのため



鎌ヶ谷市の皆さんと
最後列中央がウェンディさん

良い本とは「子どもが自分で選ぶ本」

鳴門教育大学名誉教授 佐々木宏子

ウェンディさんとの出あいの中で鮮明に残っているのは、次のような会話である。

私がイギリスには子どもにとって「良い本」の概念はあるかと尋ねた時、穏やかな笑みをたたえつつも、瞬時に「それは子どもが自分で選ぶ本でしょう」という言葉が返ってきた。

彼女は、小学生のころ夢中になって読んだ本を大人になって読み直してみると、なぜ夢中になったのか「さっぱり分かりませんでした」と述べている。だから、子どもが子ども時代に面白いと感じる本を自分で選び読むことの自由は、何よりも重要なことであるはずだと。

子どもに「読むこと」の大切さを伝えることを生涯の仕事として選んだ彼女はまた、大人の心で選んだ子どもの本は、時には自らの子ども時代と新たに発見した文学の中の子ども像のギャップを埋めるために、その代理体験を子どもに要求するものになってしまうのだと、冷静

に見極めることのできる人だった。

シェアブックスについても、私は最初、“本の問題”としてのみ捉えていた。しかし、彼女がブックスタートの目的は、「本がどんなに素晴らしいものか」を教えるのではないと語ったとき、心が響きあうことの喜びこそが、絵本を理解する前に必要なことだと伝えたかったのだと思った。

ウェンディさん、私は、あなたと東京で対談をさせていただく機会を持ったことを心から光栄に思います。



対談「赤ちゃん絵本」より (2016.7.9 伊藤謝恩ホール)

※お二人の対談とウェンディさんの講演の内容は、講演録「子ども・社会を考える」講演会シリーズ vol.4「すべての赤ちゃんに絵本を」(NPOブックスタート編/2019年)として発行しています。

旅の物語はまだ続く

NPOブックスタート理事 佐藤いづみ

旅好きで、会えばいつも、訪れた場所やそこで出会った人々について、まるで物語を語るように話してくれたウェンディさん。彼女の率直な好奇心とチャーミングな人柄が感じられるエピソードの数々は、それを集めるだけで1冊の本になりそうです。

毎年訪れるインドでは、ひょんなことから出会った大富豪の別荘を宿としていること、ロシアの調査船に乗って南極へ行った時には、毎晩お酒を飲みながら研究者や乗組員と語り合う時間がこの上なく楽しかったこと。2016年初夏の日本の旅もまた、日本のブックスタートへの思いと共に、彼女が語る物語のひとつになったのでしょう。それはやがてイギリスの推進団体ブックトラストの耳に入り、世界各地のブック

スタートをつなげ、より多くの赤ちゃんに絵本を届けることを目指す「グローバル・ネットワーク」をつくる動きへと発展しました。

旅に出るときは、いつでも手に取れる本が何冊かないと落ち着かなかったウェンディさん。天国にもトランクいっぱいの本と共に旅立たれたに違いありません。

ウェンディさん、ブックスタートの物語もまだまだ続きますからね。楽しみに見守っててください。



東京・銀座にて
当法人代表・白井/ウェンディさん/佐藤

ことのは

スタッフが出合った言葉

おかあさんもがんばってるよ。

子どもたちには、おかあさんががんばってるよ、って言ってあげたいよね。そういう気持ちで子どもと接したいよね。

福岡市博多区・中洲で、朝7時から深夜2時まで開園している「どろんこ保育園」。40年以上にわたり、真夜中に保育を必要とする子どもたちやその親を支え続ける天久薫さん(園理事長)は、この思いを大切にしながら園を運営されています。お母さんの「がんばり」をしっかり受け止め、その心に寄り添う。するとお母さんは、前に進む力を得ることができる。そして子どもたちは、そんな力を得たお母さんが誇らしく、もっともっと好きになる。そうした幸せな循環の中で、人を信じられる心も子どもたちの中に育まれているように感じました。*『真夜中の陽だまり ルポ・夜間保育園』(三宅玲子 文藝春秋)より